

学位論文の内容の要旨

氏 名

村澤 千沙

論文題目

Status and prognostic value of immunological biomarkers of breast cancer

- (論文要旨) 【背景】 癌における抗腫瘍免疫は癌の進行や予後に大きく関与する。しかし主要サブタイプであるLuminal/HER2陰性乳癌は、他の臓器癌と比較して免疫原性が低いことから抗腫瘍免疫の関与は少ないと思われる。【目的】 原発性乳癌症例において免疫学的バイオマーカーが癌の進行や予後に関与するかを検討した。【方法】 原発性乳癌術後症例71例において、主要免疫学的バイオマーカーである腫瘍内浸潤リンパ節(TIL)グレード、腫瘍細胞MHC発現、CD8陽性リンパ球浸潤、PD-L1発現を解析し臨床病理学的因子および患者予後との関連を検討した。サブタイプはLuminal/HER2陰性48例、triple-negative(TN)21例、Non-luminal HER2陽性2例であった。原発手術時臨床病期は1、2、3期がそれぞれ27、42、2例であった。症例を免疫原性の高いnon-luminal群23例と免疫原性の低いluminal群48例の2群に分類し、各群でバイオマーカー発現と予後を比較検討した。【結果】 乳癌全例：PD-L1(SP263)、MHC発現を除くすべてのバイオマーカー発現が有意にNon-luminal群で高かった。Non-luminal 乳癌：高TIL群では低TIL群と比較して有意なRFS延長が認められた(10年無再発生存率63.2% vs. 無再発生存期間中央値14月, $p=0.014$)。しかしながらいずれのバイオマーカーも癌の進行度との関連は見られなかった。Luminal HER2陰性乳癌：高TIL群は低TIL群と比較して有意に進行例が多かった($p=0.024$)。またかろうじて有意差は得られなかったが、高TIL群は低TIL群と比較して無再発生存率が低かった(10年無再発生存率58.3% vs. 79.2%, $p=0.057$)。他のバイオマーカーには癌の進行や予後との関連は認められなかった。TILは明らかに予後因子であると考えられたが、免疫原性によってその正負の相関が異なることが示唆された。PD-L1はNon-luminal乳癌では予後に関連している可能性が示唆されたが、Luminal乳癌では関連が認められなかった。【結語】 乳癌においてはTILが予後因子である可能性が示唆されたが、サブタイプによって予後良悪が異なっていた。Luminal HER2陰性乳癌では高TIL群は予後不良の傾向があったが、non-luminal乳癌では逆に予後良好であった。PD-L1はNon-luminal乳癌においてのみ予後因子である可能性が示唆された。

掲 載 誌 名	ONCOLOGY LETTERS		
(公表予定) 掲 載 年 月	令和5年 3 月	出版社(等)名	Spandidos Publications
Peer Review	有 ・ 無		

(備考) 論文要旨は、日本語で1,500字以内にまとめてください。